

情報を幅広く，フラットに



山本 博之

会員の皆さまは、本学会がどのような状況にあり、どういったルールに基づき運営され、どちらの方向に進もうとしているか、多少なりともご存じであろうか。もちろん、これを知ったからといって学会で発表する題材が得られるわけでも、よい論文が書けるようになるわけでもない。早下会長による学会の現状に関する記事をお読みの方も少なくはないものと思うが、それでもまだまだ多くの皆さまには「誰かがきつとまよくやっているのだろう…」くらいの認識ではないだろうか。では筆者はどうか、と問われると、私自身も最近ようやくその輪郭らしきものをつかみ始めているに過ぎない。自らの不明を恥ずるばかりである。「明日も同じような仲間と楽しく議論を行い、その成果を論ずる場がどこから降ってくる…」と思っていたし、それが当たり前であろうと疑うこともなかったものである。ところが最近になり、学会でのいくつかの仕事をお引き受けするようになってみると、どうもそのような簡単なことではないことに気がき始めた。そして「明日」は決して約束されているものではなく、今までの活動や、仲間との場が用意されることも必ずしも自明ではないことを強く感じている。

このように感じ始めたことも、学会の現状を示す様々な事実やデータに触れたことに他ならない。もちろん、何もかも日の下にさらすことが必ずしも適切ではないし、限られた方々で情報を把握すべき場合が少なからずあるだろうことは想像に難くない。それでも可能な限り幅広く会員の皆さまが同じ事実を知り得る環境にあり、情報を共有することは、会全体の相互理解と信頼感、会員としての納得感の醸成に強い意味があるものと思う。多くの会員の中には運営のあり方一つをとっても方向性の異なる考えをお持ちの方々がそれぞれにおられることであろう。当然議論は百出する。しかしながら、元より基盤となる情報が各人で異なっているのではその議論の素地すら危ういこととなりかねない。何より我々分析に携わる者は共通に定義された標準や参照とすべきものを原点としての議論を最も大切にしている集団ではなかったか。

そうは言いつつも、現実的には学会のような「常時一緒にはいない」組織で皆さまがそれぞれに活動される中、同じ情報を持つことは意外に難しいことなのかもしれないと思う。ただ幸いにも現代のネットワーク環境はその点には好都合な環境であろう。地味な取り組みではあろうが、学会の基本的なルールや新たに定められたことなど、意志決定のプロセスとともにできるところからこつこつと周知し、ふと学会のことを思いだした折に会員の皆さまがいつでもその情報にアクセスできるようにすることは、一歩進んだ情報共有の姿であるとともに皆さまの納得感にもつながるのではないか。何より多くの方々が「これはおかしい」と思えるようなことが生じれば是正の力が働く源にもなり得よう。

関東支部長を拝命した本年度、私自身何ができたであろうと自省しつつ、微力を尽くせばと念じる日々である。

〔Hiroyuki YAMAMOTO, 量子科学技術研究開発機構, 日本分析化学会関東支部長〕